開会挨拶

小口正範

日本原子力研究開発機構 理事長

本日は当機構の先端基礎研究センター設立30周年記念式典に多数の方々にご参加いただきまして、心から御礼を申し上げます。またご来賓としてご挨拶を賜る、量子科学技術研究開発機構理事長 小安重夫様、大阪大学核物理研究センター長 中野貴志様、ドイツマックスプランク協会副総裁のClaudia Felser様、文部科学省研究開発局長 千原由幸様、そして特別講演をいただきます、東京大学カブリ数物連携宇宙研究機構特別教授 村山斉様に改めまして、深く感謝申し上げます。

日本原子力研究開発機構は、原子力の専門的な研究開発機関として、原子力科学技術を通じて、人類社会の福祉と繁栄に貢献するという重大な使命を担っております。特に昨年私が理事長に就任して以来、『ニュークリア×リニューアブル』で拓く新しい未来、をビジョンに掲げ、ニュークリアとリニューアブルの相乗効果、シナジーのための研究開発、原子力自体を持続可能、すなわちサステナブルにするための研究開発、そして原子力利用の多様化、ユビキタス化に向けた研究開発、の3つの柱を打ち出しております。先端基礎研究センターは原子力研究開発の課題に対して、原理現象の根元に立ち返って課題解決を図ること、さらには一般の基礎科学との協調により、他の分野の開発を先導し、研究の発展を図ることを理念として、1993年に旧日本原子力研究所内に設置されました。日本原子力研究所は2005年に核燃料サイクル機構と統合し、日本原子力研究開発機構が誕生しましたが、その後も先端基礎研究センターは当機構の最も基礎基盤となる研究を支え、今日に至っております。

基礎研究といえども、それぞれの研究者がバラバラに好きなことをやれば良いということでは決してなく、その成果は現在機構が打ち出しているシナジー、サステナブル、ユビキタスという3つの方向性に沿って、ビジョンに掲げる『ニュークリア×リニューアブル』で拓く新しい未来の創造に貢献するものでなければなりません。一方で、原子力が抱える様々な課題の解決に向けイノベーションの創出が強く求められている今日、従来の技術で既成概念にとらわれない、真に自由で斬新な発想に基づく多様な挑戦的研究の推進は必要不可欠であります。先端基礎研究センターの活動には、まさにこの点で大きく期待をしているところでございます。

ここで先端基礎研究センターの皆さんに私の思いを少し伝えたいと思います。それは先端と言う意味を改めて考えていただきたいということです。研究開発が社会の発展とシンクロしている以上、先端研究と言うものは、社会の先端であることを意味するのではないでしょうか。そして社会は常に動いています。言い換えれば、30年前の先端はもはや今日の先端ではないと言うことです。私は研究開発にはダイナミズムが必要だと思っております。なぜならば、社会がダイナミックに動いているからです。今社会は脱炭素社会の実現に向けて大きく方向性を変えております。この変化にぜひとも先んじて今後の研究開発に改めて努めていただきたいと思っております。その意味で今日の記念式典では、過去30年の歴史を振り返るだけではなく、これからの30年を語り考える機会としていただきたいと切に希望いたします。

日本原子力研究開発機構、そして先端基礎研究センターに対しまして、今後とも皆様のご支援とご協力をお願い申し上げまして、私の挨拶といたします。ありがとうございました。